

<研究ノート>

ノートカーにおける ,fortuna' と
,fatum' の訳語をめぐって

丑 田 弘 忍

自由意志の働く余地なく、我々人間を操っている何人もこれから逃れることがなく、また変えることの出来ない超自然的な力を日本語で「運命」、「運」、「宿命」、「天命」などと呼んでいる。ラテン語では、これらは *fatum*, *fortuna*, *sors* などと呼ばれている。*fortuna* を語源的にさかのぼるならば、その *for-* の部分は、*fero*「運ぶ」、*fors*「偶然」などと同じく、印欧語根 **bher-*「運ぶ、もたらす」に由来する。これに語幹形成接尾辞及び屈折語尾 **-tu-s* を伴う零階梯 *bhr-tu-s* より *fortuna* が生じ、** bhr̥tis* より *fors* が生じたとされている (Pokorny 130)。語幹形成接尾辞 *-tu-* は *nomen actionis* であって、*fortuna* は全体で元来「産出されるもの（こと）」であり、擬人化されて、「豊作をもたらす者」の意味で使用された。ジュピターと対抗して、運命の女神、つまりはあてにならぬ偶然の擬人化としての意味を得るのはずっと後になってからである。それにはギリシア神話の *τύχη* の影響が大いに働いた。この運命の女神 *Fortuna* を崇拝の対象としてローマに導入したのは *Oxford Classical Dictionary* (445) によれば、6代目のローマ王 *Servius Tullius* (578-535 B.C.) であったと言われている。ローマでは *Fortuna* は男女、階級、日々 (*Fortuna muliebris, virilis, equestris, huiusce diei*) の守護神として、また後には、皇帝、軍人 (*Fortuna Augusta, aurea, redux*) 等の守護神として崇拝された。また *Fortuna* はその性質上、幸運をもたらす女神の面と気紛れな女神の面とに

分けられた (Fortuna stabilis, respiciens, manens, obsequens, memor, salutaris, bona/Fortuna fors, mala, dubia など)。前者には舵と豊穡の角笛がそえられ、後者にはその移り気や気紛れの象徴として球と王輪がそえられた。この Fortuna の二面性はアウグストゥスの後の時代には姿を消してしまう。今や Fortuna はイーシスやネメシス及びその他の神々の属性を得るに至り、Fortuna Panthea (万神の) として、多くの神々の機能を吸収し、球や車輪の上に立ち、舵や豊穡の角笛を持って、かって気ままに己が気分に従って人間の運命を司ることになる。ここに Fortuna は *τύχη* と同じくあらゆる人々によって呼びかけられ、幸運にあっては愛され、不運にあっては呪われる「幸運な、しかしあてにならない偶然の女神」となる。

このような意味を有し、圧倒的な力を持って人間存在に迫る来たる運命はキリスト教にとってはなほだ不都合であったことは明らかである。ギリシアの神々と同じく、キリスト教によって異教神たる Fortuna は呪詛されたり、寓意化されるに至った。古典古代からキリスト教的中世への過渡期においてこの Fortuna を神学的に考察したのはアウグスティヌスが最初であった。アウグスティヌスは「神の国」の第 4 巻 18, 9 章, 第 5 巻 1 章, 第 7 巻 3 章において Fortuna に言及している。そこにおいて、アウグスティヌスはこの異教の神 Fortuna を悪霊の下に呪詛したのであった。次に Fortuna を哲学的に考察したのは最後のローマ人と言われるボエティウスであった。彼は運命との対決の書と呼んで言いほどの *de Consolatione Philosophiae* 「哲学の慰め」において、Fortuna を幸福の無常と無意識のアレゴーとして見ている。このように古典古代末期のキリスト教によって軽んぜられた Fortuna の姿はその後完全に抹殺されることなく、中世において文学や芸術の中に生きつづけることになった。しかしそれはあの古典古代の Fortuna 像ではなく、神の下に従属させられてキリスト教化された Fortuna の姿であった。

他方、さらに「運命」、「宿命」を意味するラテン語 *fatum* は、動詞 *for* 「話す」の過去分詞にて、印欧語根 **bhā-* 「言う」にさかのぼり得る

(Pokorny 105, Watkins 5)。従って, fatum は原義的には「語られたること (特に神によって)」を意味していた。この点, ローマ人は fatum と for の語源的な関係を意識的に感じていたようであるし, アウグスティヌスもこれを知っていた。例えば, hic tibi-fabor enim, quando haec te cura remordet, longius et volvens fatorum arcana morebo, Verg. A. 1, 261-2 「アエネーアースのことにつき, 汝が心病むならば, かれに関して運命の秘密をしるす巻物をひらき展べつつこまやかに未来を語って聞かせよう (泉井訳)」。またローマ人にとって fatum なる語は semel dictum (ひとたび語られたこと) であった。vosque, veraces cecinisse Parcae, Quod semel dictum est stabilisque rerum Terminus serret, bona iam paractis Iungite fata, Hor c. saec 25-28 「さらに, なんじら, 予言に虚言なかりし運命の女神よ, ひとたび宣られしが如く一かつ, 安泰に事成りゆきて宣られしことを毀たざれ一, (将来の) よき運命をば, すでに過ぎ去りし世に結びたまえ (藤井訳)」。さらにローマの世界では神々や人間を支配する力としての意味を得, その力はくつがえしがたく, 人間のみならず, 神々もこれに縛られている。たいてい fatum はジュピターの手に握られている。fortuna がギリシアの τύχη に相当しているように, この fatum は μοῖρα に相当している。擬人化された μοῖρα はローマ神話の Parcae に匹敵し, この運命の三女神 Parcae の表示として三人の Fata (tria fata) の観念が形成された。キリスト教世界に至ると, 古典古代の異教的な幸運な女神のあまりにも明白な性質を具えた横暴で残酷な fortuna よりも容易にこの fatum は, キリスト教的な解釈において神の手中にある運命として解釈せられるのである。アウグスティヌスは古典の伝統に従いつつも fatum をそのように解釈して「神の国」の第5巻9章においてこう述べている。

Ordinem autem causarum, ubi voluntas Dei plurimum potest, neque negamus, neque fati vocabulo nuncupamus, nisi forte ut fatum a fando dictum intellegamus, id est a loquendo; non enim abnuere possumus esse scriptum in litteris sancitis: *Semel locutus est Deus, duo haec audiui, quoniam potestas Dei et tibi, Domine, misericordia, qui*

reddis unicuique secundum opera eius. Quod enim dictum est: Semel locutus est, intellegitur „inmobilitate“, hoc est incommutabiliter, „est locutus“, sicut novit incommutabiliter omnia quae futura sunt et quae ipse facturus est. Hac itaque ratione possemus a fando fatum appellare, nisi hoc nomen iam in alia re soleret intellegi, quo corda hominum nolumus inclinari.「だが、わたしたちは、神の意志が大いなる勢力をふるっている場合には、原因の秩序を否定しないし、それを運命という単語で呼びもしない。もしかして運命が「語ること」から来ていると解さないならば。というのは、わたしたちは聖書の中で次のように書かれていることを否定しえないからである。「神はひとたび語られた、わたしたちはふたたびこれを聞いた、力は神に属することを。主よ、いつくしみもまたあなたに属することを。あなたは各人にそのわざにしたがって報いられる」。「ひとたび語られた」といわれていることは「断乎として」すなわち、恒常不変的に「語られた」ということである。つまりそれは、神は将来起こることやご自身がなさそうとしておられることを、すべて恒常不変的に知っておられるからである。それゆえこのような理由にしたがって、わたしたちは「運命」を語るに由来するものとして用いることができる。もしこの言葉がすでに一般に理解されているように、他の事柄を指すものでないならば、しかし、そこへ人々の心が向かうのをわたしたちは願っていない（赤木、泉、金子訳）」。

扱、本ノートの目的は、ザンクトガレンのノートカーの翻訳作品において古典古代の概念たる *fortuna*, *fatum* が彼によっていかにとらえられ、ドイツ語の世界にいかに移されたかを検討しようとするものであるが、特に *fatum*, *fortuna* がしばしばあらわれるのは、彼が翻訳したボエティウスの *de consolatio philosophiae* であった。この書ほど全ヨーロッパ中世を通じて人々の精神的な支柱となった書はほかにはない。はやくはイギリスにおいてアルフレッドによって、下ってチャーターによって翻訳され、ドイツ語圏ではノートカーが先鞭をつけた書であった。

日本語で同じく「運命」と訳されても、ボエティウスにあっては *fatum*

と fortuna は同一視されてはならない (但し第4巻6章以前ではこの限りではない)。fatum は神の精神が与える一つの様式なのである。神の摂理 (providentia) の他の一面であって、fatum と providentia は表裏の関係にある。fatum は時間によって変動し、providentia は時間のまとまりにおいて展開され、fatum と providentia は互いに補完作用をなしているが、fatum は providentia に従属している。従って fatum に従属するものは Providentia にも従属するものである (IV pr. 6)。一方、fortuna は無常な物質的な価値の総体として形而下に位置せられるものである。簡単にまとめれば最終的にこのような属性がうかびあがるが、付随的な属性がそれぞれに伴うであろう。fortuna はその意味内容によっていくつかに分類することが出来よう。そのことに関しては、相応するノートカーの訳語において検討したい。

次にノートカーが彼の諸翻訳作品において、Grundsprache としてのラテン語 fortuna, fatum が Zielsprache としての古高ドイツ語にいかにあらわしたかを見ていこう。Nb. において fortuna が「運命の女神」の意味で擬人化されている場合には訳されていずにそのままである (Nb 33, 16; 44, 23; 48, 21; 61, 15; 63, 21; 64, 27; 70, 12; 73, 5; 85, 20; 90, 19; 94, 18; 98, 17; 101, 18; 101, 27; 116, 25; 132, 17; 319, 9, 20)。また fatum は Nb においてはそのほとんどが訳されていない (Nb 297, 11; 298, 2, 11; 299, 6 など), これは恐らく providentia との関連において語られている時だと思われる。その他では、ノートカーの作品において fortuna と fatum は次のような語に訳されているか、言い換えられている。fortuna は salda, unsalda, liutsalda, uuerltsalda, trugesalda, uuilsalda, zuifelsalda, saldolih, saligheit, guot, sacha, misseskiht, unil(e)uuendigi, geskehen, inblandena, trugetiuel, heil に、fatum は hinagereccheda, misseskiht, sestunga, tod, urlag, uuizegtuom, gotes uuilo に。一つ一つの語についてなぜそのように訳されねばなかったかを中心にして検討してみよう。

(1) **salda, saldoli, unsalda, trugesalda, liutsalda, uuerltsalda, uuilsalda, zuifelsalda, saligheit**

salda 及びその合成語がノートカーにおいて fortuna の訳語に用いられている。この語の語幹部分 sal-は印欧語根 *sel-または *selə に引き戻しうる。その意味は「都合のよい、良い気分の」であった (Pokorny 900, Watkins 57)。下ってゲルマン語において *e-は *ē-と延長され、原ゲルマン語 *sēl-が推定される。それはゴート語 sēls「良い、役に立つ」、古ノルド語 sæll「幸福な」、古英語 sæl「幸運」、形容詞構成要素 -ig を伴なって古英語 gesælig「幸福な」、古高ドイツ語 sālīg「幸福な、至福な」となってあらわれる。sālīgheit はこの sālīg に様態を現わす名詞構成要素 -heit を伴なった形である。また当該の salde は、抽象名詞構成要素 -ida を伴なった形で、古高ドイツ語 sālida「幸福」、古英語 sæld, 古ノルド語 sæld「幸福」としてあらわれる。-i-は古高ドイツ語の末期に落ちてしまったようである。

sal(i)da は古高ドイツ語の作品においては、古くは Abrogans, 及びその他の Glossen に、Isidor, Otfrid を経てノートカーにあらわれる。Abrogans では beatitas「至福」、felicitas「幸福」に対応している。同じく Glossen の Isidori Etymologiae (Ahd. Gl II 304, 20, clm. 6411, 9世紀) には Fortuna-salida があらわれる。同じく Glossae Salomonis (Ahd. Gl IV 143, 55 Codex musei Britannici Add. 18379 9世紀末) にも Fortuna-selid があらわれている。Isidor では beatitudo が salida で訳され、次のような個所にあらわれる。Deus cum hominem fecisset summa beatitudine praeditum et diuine imaginis decore honoratum. . . . Got so ir erist mannan chifrumida mit dhēm hohistom salidhom odagan endi mit scuonin dhera gotliihhun chilihnissa chieredan. . . (28, 18)「神が最高の至福を伴なった神の似姿で飾られた人間を作った時……」。このように、この beatitudo は宗教的な意味で用いられており、これは salida で訳されている。Otfrid には salida は5回あらわれ、beatus, salus, sano の対応が考えられる。Otfrid には Vulgata が背景となっているので、意味するところは、宗教的な意味の「至福、救い」である。

ノートカーにおいては *salda* は *fortuna* のほかに, *felicitas*, *beatitudo*, *benedictio*, *fortuitus*, *bonus*, *felix*, *salus* などの訳としてあらわれる。この中で *benedictio* と *salus* は Np. にしかあらわれない。そこでは *segen* や *heil* と同義となっている。

Consolatio には「幸福」を表わす語に *beatitudo* と *felicitas* の両方の語が用いられていて、運命と幸福をテーマとしている第2巻以降に頻出する。特に *beatitudo* は第2巻以降にしかあらわれない。ではこの両語にはいかなる意味の相違があるであろうか。*felicitas* なる語はまず第一に本来は中立的な概念といえよう。これに *falsa* 「偽りの」、*caduca* 「はかない」、*abitura* 「立ち去らんとする」、*fortuitus* 「偶然の」、*fragilis* 「もろい」、*imperfecta* 「未完の」、*mendax* 「虚偽の」、*mutabilis* 「変化に富む」などの付加語が加えられて、現世的、表面的、無常な「幸福」の意味として規定される。逆に *vera* 「真実の」、*summa* 「最高の」、*composita* 「整った」、*perfecta* 「完全な」などが加えられると、理想的、終極的、来世的な「幸福」が意味される。一方、*beatitudo* は、コンテキストの上から *felicitas* と明確に区別出来ない個所もあるが、大方、*vera felicitas* の意味と一致するものである。その傾向は *Consolatio* の第3巻においてははっきりあらわれている。なぜならば、*beatitudo* は *summum bonum* 「最高善」であり、*summus deus* 「最高の神」の中にあるからである(Ⅲ, pr. 10)。では、Nb では *beatitudo* と *felicitas* はどのようにドイツ語に訳されているだろうか。主に *salda* と *saligkeit* に訳されているが、その頻度は次のようである。

	<i>salda</i>	<i>saligkeit</i>	その他(無訳など)
<i>beatitudo</i> (62)	5 (8%)	33 (53%)	24 (39%)
<i>felicitas</i> (31)	18 (58%)	8 (26%)	5 (16%)
<i>fortuna</i> (<i>prospera</i>) (61)	13	2	

salda と saligkeit の使われ方が beatitudo と felicitas でその数において、丁度逆になっている。また beatitudo と felicitas の形容詞 beatus と felix において、felix の訳としては salda と salig の両方が用いられているが、beatus の訳には salig しか用いられていない。古高ドイツ語の salig は一般的に beatus の影響を受けて「神に祝福された」の宗教的意味合いが強い。それだからといって Nb において明瞭に、saligkeit が高い宗教的な意味の幸福をあらわし、salda が低い世俗的な意味の幸福を表わしているとは限らない。felicitas は大体において、salda で訳されているが、中立的な意味において、いなむしろ「幸運」に近い意味において saligkeit で訳されている。しかし一例だけ falsa felicitas (II, pr. 1) が lukkiu saligkeit (nhd. lügenhafte Seligkeit) (Nb 62, 1) で訳されている。恐らく、saligkeit は salda に包含される一概念にすぎないのではなかろうか。従って salda の方が saligkeit よりも意味範囲が広いと言えよう。Schröbler (141f) は Nb における salda の用法を次の6項目に分類している。この分類は当を得ていると思われるので、以下に引用してみよう。1) ohne lateinischen Gegenwert oder in freier Umschreibung einer lat. Wendung für Glück (nicht im theologischen Sinne), neunmal im Plural, einmal ist nicht zu entscheiden, ob im Singular oder Plural, einmal im Singular, wo es sich um das höchste Glück handelt 2) für lat. felicitas 'Glück' a) neutral, weder abwertend gebraucht noch von der höchsten Seligkeit, b) abschätzig im Sinne von 'lügnerisches Glück', c) vom höchsten Zustand des Glückes, welchen der in die wahre Heimat Zurückgekehrte genießt, 3) für lat. beatitudo, Glückseligkeit, Glück im höheren Sinne (Nb 106, 23 ironisch für das Glück, das irdische Schätze gewähren), 4) für lat. fortuna 'Glück', neutral oder abwertend, 5) für lat. prospera fortuna, 6) für lat. fortuna 'Geschick'。

このように salda なる語は「幸福」を意味するあらゆる局面に用いられている。Schröbler は各々について例を挙げていないので、一応 Nb にお

けるどの *salda* が上のどのの意味に該当していると考えられるか、調べてみることにする。1) のラテン語に相応語がない場合、あるいは言い換えられている場合の例として、次の個所が挙げられよう。Et fugato spem . nec adsit dolor. Kedíngi nehábe . ríuuûn nehábe. Táz chît . neménde dero sâldôn ío ána . nefúrhte únsâldâ hínafure (Nb. 57, 3–6) 「望みを捨てよ、悲しみを近づけるな。(ボエティウスの *Consolatio* の和訳は世界古典文学全集の渡辺義雄訳に従った。以下同じである)」。この場合 *salda* は *spes* の訳ではなく、*gedingi* 「希望」の言い換えになっている。さらに Nb. には *bonum* 「善」の訳としての *salda* があらわれるが *bonum* も *Glück* の範疇に加えられている (例えば III pr 2) ので、ここに入れられてよいと思う。次のような例に見られる。Faciunt enim quaelibet . dum per ea quibus delectantur . adepturos se putant id bonum quod desiderant. Sie tûont . táz sie uuéllen . uuánda sie dáz tûondo . dés sie lústet sih uuânent sâldâ guuínnen . déro sie lángêt. (Nb 263,26–264, 2) 「なぜならば、彼らは勝手なことをして好きなことをして彼らの欲する善を手に入れようとするが、決して獲得しないからです」。2) は *felicitas* の訳語としての *salda* で全部で 18 回あらわれる。a) には次のような個所が該当すると考えられる。①Nb. 82, 9②Nb 90, 1③Nb 164, 26④Nb 168, 6⑤Nb 310, 25。この中で一例を挙げてみよう。An oblitus es numerum·modumque tuae felicitatis. Hábest tû ergézen dînero sâldôn . uuíolih unde uuío mánig sie uuâren? (Nb 82, 8–10) 「あなたは、あなたの受けた幸福の数と大きさを忘れたのですか」。b) には次のような個所が該当すると考えられる。①Nb62, 24②Nb 88, 21,③Nb 95, 12④Nb 133, 1⑤Nb 145, 3⑥Nb 181, 7⑦Nb 186, 27⑧Nb 197, 18。ここでは、表面的で、みせかけだけの消極的な意味での幸福が問題とされ、その意味にふさわしい形容詞が付加される場合が多い。①ではボエティウスの原典の付加語 *abitura* をノートカーは *recessura* 「離れんとする」と注解し、これを *murgfara* (= *hinfällig, unbeständig, vergänglich*) で訳している。③では *caduca* も *murgfara* で訳され、⑥⑦の *falsa felicitas* は

lukkiu salda と訳されている。この項の典型的な⑥の文を挙げてみよう。
 Hactenus suffecerit demonstrasse formam falsae felicitatis. Nû lâ dir
 gnûoge geóuget sin lúkkero sâldôn bîlde (Nb 181, 6-8)「私はこれまで
 偽りの幸福の形態を示してきましたが、もう充分でしょう」。c) について
 は次のような個所が該当すると考えられる。①Nb 94, 7②Nb 94, 11③Nb
 187, 10,④Nb 196, 9⑤Nb 229, 7 ここでは積極的な真の意味での「幸福」
 が問題とされている。そのような意味にふさわしい *summa, perfecta* などの
 形容詞が付加されている。一例を挙げてみよう。Ostendam tibi breui-
 ter . cardinem summae felicitatis. Íh óugo dir . an uuíu die méisten
 sâldâ sint . uuâr sie óna uuérbent (Nb94, 9-12)「私はあなたに最高の幸
 福の要旨を簡単に教えましょう」。3) の *beatitudo* の訳語としての *salda*
 は次のような個所にあらわれる。①Nb 94, 22,②Nb 106, 25③Nb 140, 29,
 ④Nb 206, 3⑤Nb 264, 4 ここにおける *beatitudo* は②の反語的用法以外
 は、あらゆる善を包含する最高の終極的な幸福で、Nb では多く *saligheit*
 であらわされている。②と③の例を挙げてみよう。O preclara opum
 mortalium beatitudo . quam cum adeptus fueris . securus esse des-
 istis. Uuóla uuíu tiure . die sâldâ dero ôtuuálôn sint. Sie sint créhto sô
 tíure . sô dû sie guúnnest . táz tu fúrder síchure neuuírdest. Táz
 heizet irrisio yronica. (Nb 106, 23-27)「財宝のもたらす幸福は、何と結構
 なものでしょう。あなたがそれを手に入れたとき、あなたは安全ではない
 のです」。ノートカー自身この文がイロニー (*irrisio yronica*) であることを歌
 っている。Liquet igitur esse beatitudinem . statum bonorum
 omnium congregatione perfectum . Pedíu ist óffen . sâldâ uuésen
 álles kûotes fóllûn (Nb 140, 27-29)「それ故、幸福とは明らかにあらゆる
 善を包括した完全な状態のことです」。4) の *fortuna* の訳語としての
salda には次のような個所が該当すると考えられる。①Nb 8,15②Nb 58,
 13③Nb 86, 26④Nb 87, 22⑤Nb 95, 4⑥Nb 143, 8⑦Nb 168, 4⑧Nb 311,
 13。この種類の *fortuna* は2) の *felicitas* の a) 及び b) に相当していて、
 中立的な意味、及び *vergänglich* な消極的な意味を有している。一例を挙

げよう。Tabescis affectu et desiderio prioris fortunae . Sô suuindest tu fóre démo niete dero êrerûn sâldo (Nb 58, 12-13)「あなたは以前の運命を愛惜し渴望するあまり、病んでいるのです」。5)の prospera fortuna の訳語としての salda には次の個所が挙げられうる。①Nb 24, 3②Nb 132, 27。Quisquis serenus composito aeuo subegit pedibus fatum . i. prosperam fortunam et rectus tuens . i. recte intuitus est utramque fortunam. So-uuélêr in sínemo áltêre stíllêr . únde gezógenêr . sâlda in uersihte hábeta . únde er áfter réhte béidíu uersáh . ih méino sâlda . ióh únsâlda (Nb 23, 28-24, 4)「晴れ晴れとした気持で生涯を送り、尊大な運命をひざまずかせ、時運の盛衰をひたと見つめて」。ここにあらわれた fatum は fortuna と区別できない (Gruber 110)。本来のテキストには fatum superbum となっているが、ノートカーのテキストでは superbum は欠けている。もし superbum を prospera と解釈しているなら、それは当たっているとは思われない、恐らくノートカーの使用したテキストでも superbum は欠けていたであろう。そして fatum のみを prospera fortuna と解釈し、これを salda で言い換えたのであろう。② Etenim plus reor prodesse hominibus aduersam quam prosperam fortunam. Íh áhtôn gréhto únsâlda uuílôn bézerûn uuésen . dien ménniskôn . dânnê sâlda (Nb 132, 24-27)「それというのも、運命は好意を示してくれるよりも、つらくあたってくれるほうが人間のためになる、と私は考えているからです」。ここでは prospera fortuna が aduersa fortuna と対立して、salda とその対立語 unsalda で訳されている。6)の fortuna の訳語としての salda には次の個所が挙げられうる。①Nb 317, 23 ②318, 27 ③322, 11。① omnem inquit bonam prorsus esse fortunam. Kúot uuésen béide . sâldâ ióh únsâldâ. (Nb 317, 21-23)「運命はすべて本当に善いものであるということです」。② Quia id hominum communis sermo usurpat . et quidem crebo . quorundam malam esse fortuuam . Uuánda iz tero líuto gechôse íst chád ih . ióh tíccho . súmelichên fólghên úbele sâldâ (Nb 318, 23-27)「人々の日常の会話では、

誰その運命は悪いと言われ」。③ *In uestra enim situm man . qualem uobis fortunam formare malitis. Íz stât an diu . uuîolicha sâlda ír íu sképfen uuéllênt . uuîo ébenso ír íuuih íro geháben uuéllênt* (Nb 322, 9–12)「それと言うのも、あなたがたが自分のためにどのような運命を形づくりたいかは、あなたがたの手中にあるからです」。ここにあらわれる *fortuna* は絶大なる力をもって人間存在に迫り来るなにがしかの力と解せられる、これも *salda* によって訳される。

以上 Schröbler の分類に従って、*fortuna* 以外の訳語としての *salda* をも挙げて来たが、それは *salda* の持つ意味の性質を知ろうとしたからである。*salda* は古高ドイツ語のすべて時代にあらわれ、宗教的意味と非宗教的意味をあわせ持っており、ノートカーにおいてもその両方があらわれていて、上に見たようにかなりの意味の広がりを見せている全称的概念であると言いうことが出来よう。この *salda* は中高ドイツ語の時代を通して生き続けたが、15, 6 世紀には消滅してしまう。恐らく *Glück* によって駆逐されたためであろう。

salda の形容詞 *saldolih* は Nb において *omnis fortuna* 「運命なるものはすべて」の訳語として 3 例あらわれる。①Nb 318, 3 ② Nb 320, 27 ③ Nb 321, 26。ここにあらわれている語形としては形容詞の名詞的用法である。一例を挙げよう。*Prelum cum omni fortuna nimis acre conseritis. Ír tribent handegen uuíg . mit sâldolichero* (Nb 321, 24–26)「あなたがたは昂然とあらゆる運命とはげしく戦い」。

salda の対立語 *unsalda* は Np においては *infelicitas* 「不幸」の訳語としてあらわれるが、Nb でも 9 回あらわれ、*infortunium* 「不幸」(Nb 88, 11; 168, 7; 173, 22) の訳語として、*prospera fortuna* に対立する *adversa fortuna* (Nb 132, 26 例として既出) の訳語として、また *utraque fortuna* (Nb 24, 4 例として既出) の訳語として *salda* と対照させられている。

salda との合成語 *trugesalda*, *liustalda*, *sundersalda* は Nb にはそれぞれ一回しかあらわれない。

trugesalda は古高ドイツ語においてノートカーにしかあらわれない彼

の造語である。前の語の語幹 *frug-* 自体の形はもはや古高ドイツ語にはあらわれず、合成語としてノートカーではこの *trugesalda* 以外に *trugebi-
lde*, *trugheit*, *trugechôsôn*, *trugelefsa*, *trugelicho*, *trugenare*, *trugeti-
euel*, *trugeuuaga* として、及び動詞 *triegen*, *betriegen* としてあらわれ
る。*trug-* は印欧語 **dhreug* にさかのぼり得、その意味は「惑わす」であ
る (Pokorny 276, Vries 81, Watkins 15)。従って、*trugesalda* は全体で
「惑わしの幸福」の意味となる。この *trugesalda* が *fortuna* の訳語として
次の個所にあらわれる。Quod existimatio plurimorum non spectat
merita rerum . sed euentum fortunae. Táz mánigero uuân síh nieht
nechêret . án díe urêhte dero uuércho . núbe an día geskiht tero
trúgesâldôn (Nb 41, 13–17) 「大多数の人の評価が事柄の真価ではなく、
運命の結果を目安にして」。この *fortuna* をノートカーは自らの造語 *tru-
gesalda* で訳した。ここにおいてボエティウスは嘆くのである。人々は物
事の核心を見ずして、*fortuna* の気紛れ、無常が作り出す結果のみを重ん
じていると、物事の核心と *fortuna* (*salda*) の様態の結末は一致しないも
のであるので、*trug-* であるとノートカーは解釈するのである。

liutsalda もノートカーの造語で、古高ドイツ語でノートカーにしかあ
らわれない。*liut* (nhd. *Leute*) と *salda* の合成語で原典の *popularis for-
tuna* を模倣したもので、ノートカーによる直訳借用語 (*Lehnübersetzung*)
とすることが出来よう。*liutsalda* は次のような個所にあらわれる。
Uideo quae sit felicitas . uel miseria constituta. in ipsis meritis pro-
borum . atque improborum . sed perpendo non nihil boni maliue
inesse . in hac ipsa populari fortuna Uuóla gesího íh . uuélih sâlig-
héit álde uuélih uuêneghéit án íro béidero frêhten stánde . dero
gûotôn . íoh tero úbelôn . nöh fánne fíndo íh óuh án sélbên dien
líutsâldón . dáz kûot únde úbel íst (Nb 288, 19–26) 「誠実な人と邪悪な
人の功罪そのもののなかに、いかなる幸福または不幸があるかというこ
とが分かりました。しかし私はこの通常の幸運そのもののなかにも、善いこと
もしくは悪いことがかなりあると思います」。この *popularis fortuna* と

は、多くの人によって幸運として認められうるものとして解せられる。これをノートカーは *liutsalda* と訳しているが、ラテン語の原典なくして、この *liutsalda* なる表現がそのまま古高ドイツ語の人たちに理解されたかははなはだ疑問である。

uuerltsalda も古高ドイツ語で、ノートカーにしかあらわれない彼の造語である。*uuerlt* (nhd. Welt) と *salda* の合成語で「現世の幸福」に近い意味である。この *uuerltsalda* は Nb において *fortuita felicitas* の訳語として (Nb 96, 14), *fortuna* の訳語として (Nb, 118, 9), 及びラテン語の原拠なしに (Nb 138, 21, 29) あられる。Np においては *terrena felicitas* 「この世の幸福」の訳語として (Np 125, 17; 256, 7; 341, 20), 神の中に見い出される *caelestis felicitas* の対立すべき概念となってあらわれ、また *temporalis felicitas* 「一時的な幸福」の訳語として (Np 413, 8), 恒常的な *vera felicitas* と対立すべきものとして、及びラテン語の原拠なくして用いられている ((Np 23, 12; 341, 20)。Nb においては *fortuna* の訳語として、次のような個所にあらわれる。Postremo idem licet concludere de tota fortuna . in qua nihil expetendum . nihil inesse natiuae bonitatis manifestum est. Ze demo gnôtesten . uuíle ih táz sélba féstenôn . fône állero uuérłtsáldo . án déro niehtes neíst ze gérônne . únde óffeno natûrliches kûotes nieht neíst (Nb 118, 6–11) 「最後に幸運の全体についても、同じ結論を下してさしつかえありません。幸運の中には追求に値するものも、本来の善も、少しも含まれていないことは明らかです」。ここの *fortuna* は *nihil expetendum*, *nihil natiuae bonitatis* の存在せぬ、即ち *virtus* と対立したる消極的、刹那的な意味を有している。これは「現世の幸福」の意味たる *uuerltsalda* でもって訳されている。

uuisalda もやはり古高ドイツ語時代を通じてノートカーにしかあらわれない彼の造語である。*uuisalda* は *uui* (nhd. Weile) と *salda* の合成語であり、*uui*-とある限り、何らかの時間的なかわりを有しているはずである。*uui* をさかのぼれば、印欧語根 **kui* 「気持ちよく休む」が推定され、ラテン語 *quies* 「休息」、*quiescere* 「休息する」、*quietus* 「平静な」

にあらわれ、縮小辞 l の付加によって、ゴート語 *heila*, 古高ドイツ語, 古ザクセン語 *hwil(a)*, 古フリジア語 *(h)wila*, 古英語 *hwil*, 現代英語 *while*, 古ノルド語 *hvila* にあらわれる (Kluge/Mitzka 848)。ラテン語が示しているように、この語は元来、持続的な時間の観念をあらわしている。時間をあらわす語には古高ドイツ語では *uila* のほかに, *frist*, *stunta*, *zit* があるが、ノートカーが *salda* との合成語において何故に *uila* を選んだかという疑問が生ずる。*uila* はノートカーにおいて、もはや独立した名詞として使用されずに、ことごとく副詞的に用いられている。特に Nb では *churz* などの形容詞を伴って, *uelox hora-bin churz uila* (Nb 86, 22), *una hora-in einero churzero uilo* (Nb 65, 29), *murga uila uuérenta* (Nb 95, 13) などのように, *uila* は短い刹那的な時を表わす傾向が強いようである。従って, *salda* との結合によって, *uilsalda* は短かい, *murgfare* な消極的な幸福として解されよう。この *uilsalda* は *fortuna* の訳として Nb の次の個所にあらわれる。Quoniam uero quis sit rerum finis ignoras . nequam homines atque nefarios . potentes felicesque arbitraris . quoniam uero quibus gubernaculis mundus regatur oblitus es . has fortunarum uices estimas sine rectore fluitare . magnae causae non modo ad morbum . uerum quoque ad interitum. Sîd tû neuuêist . tero dîngo énde . dâz íst taz trítta . únde dû uuânest fertâne líute máhtige únde sâlige . dâz íst taz fierda . uuánda du óuh ergézen hábest . mit uuíu gót tia uuérlt ríhte . dâz íst taz fímfta . únde uuânest tie uuéhsela dero uuilsâldôn tuárôn áne ríhtare . dâz íst taz séhsta . dés íst tir gnûoge . nieht éin ze súhte . núbe ze tôde (Nb 54, 23–55, 11)「あなたはまた、何が万物の終極目的であるかを知らないから、ろくでもない無法な人間を勢力のある幸福な人間と思っているのです。さらにあなたは、どんな舵によって世界があやつられているかを忘れたから、このような運命の転変があやつる人もなしに起ると考えるのです」。

Haec constringit etiam actus . et fortunas hominum . indissolubili conexione causarum. Tisíu dúíngét óuh tero ménniskôn fâte . únde

íro uuilsâlda . mit festemo bânde dero úrhabo (Nb 303, 23–26) 「それはまた人間の行動としあわせを、解きたい原因のつながりによって拘束します」。Quare inquit ita uir sapiens moleste ferre non debet . quotiens in fortunae certamen adducitur . ut uirum fortem non decet indignari . quotiens increpuit bellicus tumultus. Fône díu chád si . nesól dâne uuisemo mán dáz nieht uuégen . so-uuénne er féhten sól . mit tero uuilsâldo . álsó chûonemo chnéhte negezímet táz ze léidezenne . sô er uuíglichen stúrm gehôret (Nb 321, 5–12) 「それ故、賢人は運命との戦いに何回引き出されても苦情を言ってはなりません。それは戦争の騒ぎが大きくなるたびに、腹を立てることが勇者にふさわしくないのも同様です」。ここに共通せる *fortuna* の内容は、神の世界と対峙する人間界のうつろぎやすい現象をあらわし、消極的、否定的な意味としてとらえられうる。従って、これらはノートカーによって、そのように解釈され、*murgfare* な意味をもつ *uuilsalda* によって訳されたのである。また Nc にも *fortuna* の訳として *uuilsalda* (5回) と *zuífelsalda* (1回) が用いられているが、周知のように Martianus Capella は異教の人であり、その作品は異教の作品であり、そこにあらわれる *fortuna* は疑人化された異教の女神である。これはキリスト者ノートカーによって、否定的な意味としてとらえられ、*uuilsâlda* によって訳されたと解せられうる。*zuífelsalda* (nhd. Zweifel + *salda*) も同様に否定的な意味としてとらえられうる。

(2) *trugetieuel*

Nb の第2巻注釈4は *Descriptio Fortunae* 「運命の定義」と題して、運命の本質を述べている。哲学の女神は、運命の本質を *mutabilitas* 「変動性」と説く、これをノートカーは *uuehsel* と訳し、さらにボエティウスの原典から独立して、運命の本質を、Uuáz íst ánderes fortuna . âne mutabilitas prosperitatis . únde aduersitatis (Nb 61, 21–23) 「運命は幸運と不運の変動性以外の何ものでもない」と集約している。さらに数行後のボエティウスの原典 *deprehendisti ambiguos uultus*

caeci numinis 「あなたは盲目の女神の両面を見たのです」 に対してノートカーは Nû bechénnest tû dáz ánalútle . dés híh pérzenten trúgetieueles (Nb 62, 2-4) と訳した後に、さらに次の如き数行の注釈を加えている。Álde chíd . plíndero gút- enno . uuánda sia ueteres hábetôn . pro dea únde sia mâletôn blínda. Ziu blínda? Unánda íro gében álso getân íst . sámó si negeséhe . uuémo si gébe. Si gíbet temo uuírseren . únde úberhéuet ten bézeren (Nb 62, 4-8) 「あるいは、古人が彼女を女神として有し、盲目として表わしたが故に、盲目の女神の (両面)。なぜ、盲目なのか。彼女が与えることは、与えられる人を見ていないかのようになされるからである。彼女は悪なる人に与え、善なる人を無視する」。trugetieuel は fortuna の直接の訳語ではなく numen の訳語であるが、numen は fortuna の言い換えであるから、間接的に fortuna のことを指している。ボエティウスが fortuna の代わりに caecum numen を用いたのは、従来からの伝統に従っている。fortuna が盲目であるという思想は、ファレロンのデメトリオス (Demetorios 4BC) 以来実によくあらわれるといわれている (Gruber 168)。なぜノートカーは fortuna にこのような trugetieuel (Trugteufel) なる強烈な語を用いたのであろうか。これに対して Schröbler 等による解釈は、アウグスティヌスらによる教父の伝統、つまり古代の神々は偽りの悪霊であるとする伝統の中でノートカーは fortuna を処理しているとする解釈である (Schröbler 134, Sanders 171, Frakes 174)。先述のように trugetieul は古高ドイツ語においてノートカーにしかあらわれない彼の造語であって、前の部分の trug は「惑わす」の意味であった。後の部分 tieuel (nhd. Teufel) はノートカーだけの形で、普通古高ドイツ語では, tiufel としてあらわれるが、上部ドイツ語で iu は ie に変化した。tiufel は、古くはラテン語からの直接の借用語と考えられていたが (Raumar 38)、第2次子音推移以前にゴート語 *diabulus* から上部ドイツ語にもたらされたと見られる (Weisweiler 96, Lehman 90)。もちろんゴート語 *diabaulus* もギリシア語 *δίαβολος* かあるいはラテン語 *diabulus* からの借用語である。ラテン語 *diabulus* も当然ギリシア語からの借用語ではあるが、元々のギリシア語の意味は「中傷者」であり、そこから「悪魔」の意味が出た。従って trugetieuel は全体で「人を惑わす悪魔」の意味となろう。ボエティウスが用いた numen は「神、神性」ほどの意味であって、古典ラテン語においても、キリスト教ラテン語に

においても特に悪い意味はないが、ノートカーによって *diabulus* あるいは *daemon* の意味に解釈されたのである。それは Schröbler らの指摘通り、アウグスティヌスの伝統に従ったのであろう。

例えば、アウグスティヌスの「神の国」第7巻第33章に次のような個所がある。Per hanc ergo religionem unam et veram potuit aperiri deos gentium esse inmundissimos daemones, sub defunctarum occasionibus animarum vel creaturarum specie mundanarum deos se putari cupientes et quasi divinis honoribus eisdemque scelestis ac turpibus rebus superba inpuritate laetantes atque ad verum Deum conversionem humanis animis invidentes. Ex quorum inmanissimo et impiissimo dominatu homo liberatur, cum credit in eum, qui praebuit ad exsurgendum tantae humilitatis exemplum, quanta illi superbia ceciderunt. Hinc sunt non solum illi, de quibus multa iam diximus, et alii atque alii similes ceterarum gentium atque terrarum, sed etiam hi, de quibus nunc agimus, tamquam in senatum deorum selecti; sed plane selecti nobilitate criminum, non dignitate virtutum. 「かくして、異教徒たちの神々の正体が、不浄きわまりのないダイモンどもであることが、この唯一かつ真なる宗教によって暴露されたのである。ダイモンどもは、神々とみなされようと渴望し、死人の霊を利用したり、この世の生き物の姿を装ったりした。そしてダイモンどもは汚らわしい思い上がりから、例のおぞましくも破廉恥な事どもに、あたかもそれが神的な栄誉でもあるかのごとく歓喜し、さらに人々の魂が真なる神へと向きを変えようとするを妬んだ。人間は、悪霊どもを堕落させた思い上がりに匹敵する謙譲さの範を、人間を立ち直らせるために垂れたかた（キリスト）を信じた時、この非道きわまりない、また瀆神の極みであるダイモンどもの支配から解放されたのである。こういう手合いには、わたしたちがすでに長々と述べた神々ばかりか、さらに〔ローマ〕以外の他の諸民族や諸地方の同様の数多くの神々や、わたしたちが今言及している、あたかも神々の元老院も構成するかのようによびれた神々すらも属する。ただしこれらの神々が

選ばれたのは、明らかにそれらが備えている徳性の尊厳さによってではなく、犯した罪が際立っているためなのである（野町訳）。アウグスティヌスが意図するのはこのように異教の神々に対する *Dämonisierung* である。さらに、アウグスティヌスにおける *numen* は「神の国」においては通常複数形 *numina* で用いられ、異教の神々として「悪霊」の意味で用いられている。

例えば「神の国」第2巻26章に次のようにある。Quae cum ita sint, cum palam aperteque turpitudines crudelitatibus mixtae, opprobria numinum et crimina, sive prodita sive conficta, ipsis exposcentibus et nisi fieret irascentibus etiam certis et statutis sollemnitatibus consecrata illis et dicata claruerint atque ad omnium oculos, ut imitanda proponerentur, spectanda processerint: quid est, quod idem ipsi daemones, qui se huiusce modi voluptatibus inmundos esse spiritus confitentur, 「こういうわけであるから、残酷なものと混ぜ合わせられた醜いもの、神霊 (*numina*) どもの不品行と犯罪的行為とは—それらが事実であるか、あるいはでっち上げられたものであるかを問わず—神霊どもの希望によって定められた公けの祭りにおいて彼らのために聖別され、かつささげられたものとして広く公開されたのであり、万人の前に模倣すべきものとして提示され、これを見るために上演されたのである。こうしないと、神霊どもは怒るのである。これら悪霊 (*daemones*) どもは、その欲望によって自ら汚れた霊であることを認めている。(赤木・泉訳)」。アウグスティヌスのこのような *numen* の *Dämonisierung* の伝統に従って、ノートカーは *caecum numen*, つまり *fortuna* を *trugtiuel* と訳したと解せられる。

しかしノートカーはボエティウスの *caecum numen* に対しての第2の解釈として *blinda gutin* (*blinde Gottin*) なる語を与えているが、これはまさしく *caecum numen* の直訳と言えよう。かつ *blind* であることの理由をコメントしている。その *fortuna* の有する不平等な配慮はまさにボエティウスの *fortuna* の属性であると言えよう。Consolatio にあらわれる

utroque Fortuna (I, m. 4), fortuna conditio incerta (I, pr. 4), fortuna fallax (I, m. 1), fortuna fugax (II, pr. 1) などの表現は caecum numen と同様に, fortuna の不確かな属性をあらわすものであり, ボエティウスにおける fortuna は一種のアレゴリーと言えよう。従って caecum numen を trugtiuel と解釈したアウグスティヌスの Dämosinierung と blinda gutin と解釈したボエティウスの Allegorisierung がノートカーにおいてここに並存していると言えよう。

さらにもう一例 Consolatio において fortuna が他の語に言い換えられている語がある。第2巻1章の prodigium である。その個所は次のようになっている。Intellego multiformes fucos illius prodigii 「私はあの怪物の百面相を知っています」はノートカーによって, Íh pechénno álliv diu trúgebíldes des égetíeres (Nl 58, 18–19) と訳されている。prodigium は Georges の辞書によれば (1953), das Wunderzeichen, die Ungeheuerlichkeit, das Ungeheuer などの意味であり, ここでは「奇妙なもの(動物)」の意味であろう。ノートカーでは prodigium は egetier のほかに, miuskiht (nhd. neues Ereignis), seltsani (nhd. Seltsamkeit), uuunder (nhd. Wunder), Zeichen (nhd. Zeichen, Wunder) などに訳されている。prodigium の訳語としてノートカー以外では, Tatian, Otfrid には uuuntar のみが, Glossen には forazeihhan (nhd. Wnnderzeichen), forabouhhan (nhd. Wunderzeichen), uuuntar などがあらわれる。egetier は古高ドイツ語を通じて, ノートカーにしかあらわれない彼の造語であろう。この語はこの個所の prodigium の訳語としてのほかに, Nc で monstrem の訳語として2例あらわれる。Uuánda hercules állên monst-ris síh ío eruuéreta . dáz chít allên égetieren. Uuáz sint áber égetier . áne égesen gelíchíu tier? Sô ydra uuás únde arpiae úude centauri (Nc 103, 8–11) 「ヘラクレスがかつてあらゆる怪物, 即ち egetier から身を守ったが故に, egetier は恐ろしいものに以て動物以外の何であろうか。ヒュドラ(水蛇), ハルピュイア, ケンタウロスの如く」。このようにノートカーは egetier と egeso (etwas Schreckliches) との語源的关系を知っていた

のである。ところで, *egetier* は *ege* と *tier* の合成語である。その *ege* は印欧語 **agh* にさかのぼり得 (Pokorny 7, Lehmann 10, Watkins 1), その意味は「恐れる, 恐れている」である。印欧語 **a* は原ゲルマン語で同じく **a*, **gh* は *g* としてあらわれ, 全体で原ゲルマン語 **ag* が推定されうる。これより *es*-語幹によってゴート語 *agis*, ウムラウトの現象にさらされて, 古英語 *egesa*, *egiso*, 古高ドイツ語 *egiso* が, *i*-語幹によって古高ドイツ語 *egi* が生じた。これらの共通の意味は「恐れ, 恐怖」である。従って, *egetier* は「恐ろしい動物」の意味である。ここでノートカーはボエティウスの *fortuna* の言い換えの *prodigium* に対して *eagetier* でもってぴったりの訳語を作り出したのである。

(3) *uuiluuendigi*

uuiluuendigi も前述の *uuala* と *uuendigi* (*Veränderung*) の合成語でノートカーにしかあらわれないノートカーの造語である。全体で「短かい時の間の移ろい」ほどの意味であろう。この語は Nb にのみ 2 回あらわれ, *fortuna* の言い換え (Nb 45, 20) として, 及び *fors* の訳として (Nb 65.5) 用いられている。Non uilis pars tanti operis homines . quatimur salo fortunae. Uuір-dir mίchel tήil bίrn dīnes frā-nbāren uuērches . uuір rίngēn in dīsemo mēre dero fortunae . dāz chīt tero uuiluuēndigi (Nb 45, 16-20) 「あなたの大事業の貴重な一部であるわれわれ人間は, 運命の大海に翻弄されている」。At solidissime omnium mortalium . si incipit manere . desistit fors esse. Máнно túmbesto . pegínnet sí in stēte stān . sō neíst si uuiluuēndigi (Nb 65, 3-5) 「もし止まりはじめたら, それは廻り合せ (運命) であることをやめます」。この 2 例ともコンテキストの上から人間界における無常が強調されている。この *fortuna* と *fors* をノートカーは *uuiluuendigi* なる造語によって訳し, また言い換えたのである。

(4) *geskehen*

Nb において, 動詞 *geskehen* (nhd. *geschehen*) が *fortuna* 及びその周辺の翻訳のために, 意識的に 2 回用いられている。Et cuius umquam facinoris manifesta

confessio . ita iudices habuit in seueritate concordēs . ut non aliquos submitteret . i. ad misericordiam inclinaret . uel ipse error humani ingenii . uel conditio fortunae cunctis incerta? Únde uuér gesáh nóh sô geéinôte dingmán ze úngnâdôn . úber dén . dér ióh scúlđo eruáren uuás . íro ételichen neuuá-nti . dáz scúlde den iudicem liehto triegent . álde er óuh neuuéiz uuáz imo sélbemo geskíhet? (Nb 38, 1–9)「本人があっさり自白した犯行でも、裁判官のなかには、人間の天性がかえって迷いがちであることだの、死を免れぬすべての人間にとって運命があてにならぬ事情にあることだのを、考慮する者が幾人かはいるのに、裁判官たちが心を合わせて、こんな厳罰を下した例が今までにあるでしょうか」。Quid uero iocunda. quae in premium tribuitur bonis? Uuáz aber diu vuúnnesáma chád si . díu ze lône dien gûotên geskíhet? (Nb 320, 3–5)「それなら、善人に賞として与えられるある楽しい運命を、民衆は悪であるなどと判断しますか」。第一の例においては、原典の conditio fortunae cunctis incerta「すべての人にとって運命の不確実な事情」は uuás imo sélbemo geskíhet「彼自身に生じること」と geskehen は現代語の geschehen のように使われている。第二の例では geskehen は現代語の zuteil werden のように使われている。この2つの例に共通することは、人間が受身の状態に立たされて、運命のままに処される状態がこの geskehen なる動詞によってあらわされていると言えよう。

(5) misseskiht

misseskiht も古高ドイツ語においてノートカーにしかあらわれない彼の造語である。miss (nhd. miß) と sciht (nhd. Geschick) との合成語であり、misse-は「行為の誤り、失敗」を表し (Kluge/Mitzka, 481)、語全体で今日の Mißgeschick に相当し、「誤まった出来事」、つまり「不運、不幸」の意味をあらわしている。Nb では adversitas fortunae (Nb 88, 12), asperitas fortunae (Nb. 26, 10), adversa fortuna (Nb 42, 6) の訳語として, prospera fortuna, prosperitas fortunae に対立して、また fatum の訳語として (Nb 7, 20)、及び単独で (Nb 330, 17) 用いられている。Nam in omni aduersitate fortunae infelicissimum genus est infortunii . felicem fuisse. Neheiro sláhto . únsálda neíst sô míchel . in állên misseskíhten . sô

díu íst . taz man sih pehúget . íu êr uuésen sâligen (Nb 88, 9-13) 「というのは、どんな苦境にあっても不幸中の最大の不幸は昔は幸福であったということです」。 Nec per se satis eminet asperitas fortunae seuientis in nos? Neskínet tíu mísseskiht uuóla na . fíu mír ána-liget? (Nb 26, 8-10) 「私が運命のむごい仕打ちを受けていることを、今さら言う必要があるでしょうか」。 Hoc tantum dixerim ultimam sacrinam esse aduersae fortunae. Íh uuíle échert táz héizen . daz knôtesta léid án dero mísseskihte (Nb 42, 3-6) 「私はただ不運の最後の重荷は………ということを申し上げたいのです」。 Gloria felicis olim uiridisque iuuontae . solantur nunc mea fata . mesti senis. Êr uuâren sie gûollichí mínero iugende . nû trôstent sie míh álten . mínero mísseskihte (Nb 7, 17-20) 「幸福に潑刺と過ぎた青春の日の栄誉に、今は悲しい老いの身の不遇も慰められる」。最後の fatum は fortuna と同義であるといってよく、aduersa fortuna に置き換えられても何ら意味は変わることはないであろう。

(6) inblandena

過去分詞形 inblanden (mhd. enblanden) が aduersa fortuna の訳語 (Nb 133, 19) として「ふしあわせな運命」の意味で用いられている。古高ドイツ語 (in) blantan は印欧語根 *bhlendh 「曇らせる、曇っている」にさかのぼり得、blind と同根である (Pokorny 157)。動詞としては Otfrid とノートカーにあらわれるが、名詞 inblandeni 「嫌なこと、厄介なこと」、及び aduersus, asper, molestus の訳語として「不快」な状態を表わす語としてノートカーのみにあらわれる。postremo felix (fortuna) a uero bono deuio blanditiis trahit . aduersa (fortuna) plerumque ad uera bona reduces unco retrahit. Tánne ze lézest ketûot tiu sâliga mit íro mánmentsámi die ménnisken âuuékkôn fône demo uuâren gûote . tíu inblándena ríhtet sie áber ze uuége . únde ze demo uuâren gûote. sámó so mít chrâphen sie uuídere zíhendo (Nb 133, 15-22) 「最後にしあわせな運命は人々をへつらいによって真実の善から引き離し、ふしあわせな運命は多くの場合、人々を真実の善へ首に縄をつけても連れ戻します」。

(7) *sacha*

Nb において *fortuna* の訳語としての *sacha* が2回用いられている。Quid autem tanto strepitu fortunae desideratis? Uuáz uuéllent ír doh nû getûon . mít sô michelemo óstôde íuuerro sáchôn? (Nb 103, 18-20)「ところであなたがたは何を望んで、運命についてこんなに騒ぎ立てるのですか」。Quo uero quisquam possit exercere aliquod ius in quempiam . nisi in solum corpus . et quod infra corpus est? Uuârána mág ioman skéinen sînen geuuált . âne án demo lichamen . unde dáz temo lichamen hínderôra ist? Fortunam loquor. Íh méno sine sáchâ (Nb 114, 31-115, 2)「ある人がほかの誰かにある権利を行使するとき、その権利はただ肉体と肉体に従属するもの、すなわち私のいう運命を除いたら、いったいどこに及ぼすことができますか」。sacha はノートカーにおいて *fortuna* 以外に *res*, *opes*, *possessio*, *privatum* の訳語として用いられているが、*fortuna* の訳語として *sacha* を用いたのは古高ドイツ語ではノートカーだけであり、Glossen にもあらわれない。第一の例における *fortuna* はコンテキストの上から財産、名誉などの全く地上における現世的幸福を指している。事実次の文に *opes* が挙げられているが、それは訳されていない。従って、この *fortuna* は *opes*, *potentia*, *dignitates*, *fama* などに置き換えられてもほとんど変わりないと言えよう。これらの語は一括して *res* としてまとめられうるであろう、それはドイツ語で言えば *sacha* としてノートカーの脳裏に捉えられたであろう。*sacha* は元々「係争」の意味であったが、Glossen にはすでに *res-sahha* の対応が見られる（例えば8世紀末の Codex Sgalli 911）。従って、ノートカーの時代には *res-sahha* が定着していたであろう。第二の例では *corpus* 及び *quod infra corpus est* 「肉体の下にあるもの」が直接的に *fortuna* を指しており、Consolatio のII, pr. 4 において示されている *mentes hominum nullo modo esse mortales* 「人間の精神が決して滅びないこと」であり、*fortuitam felicitatem corporis morte finiri* 「あてにならない幸運が、肉体の死とともに終ること」という二元論的解釈に裏付けされている通り、この *fortuna* は実に *sachlich* な形而下的存在として解釈され、忠実に *sacha* と訳されたのである。

(8) lib

Nb の次のような個所に lib があらわれている。Idcirco nemo facile concordat . cum conditione suae fortunae. Pedíu neist nioman . der sih hábe geéinôt mit sit sines libes geskéfte (Nb. 92, 23-25) 「このようなわけで誰も自分の境遇にはなかなか満足しません」。lib は現代語の Leib に受け継がれているが、古高ドイツ語では Leben の意味をも有していて、ラテン語の corpus, anima, vita, mos などに対応し生命全体を意味している。従って、この個所は fortuna のみではなく、Consolatio の I. m 17-19 に、Dum levibus male fida bonis fortuna faveret, /paene caput tristis meraserat hora meum 「あてにならぬ運命のささやかな恵みを受けている間に、いつしか私は不幸の淵にほとんど首までつかっていた」とある如く、fortuna に依存せる全体を指している。これをノートカーは lib と訳している。

(9) quot

Nb に fortuna の訳語として quot が2回あらわれる。Quotiens excaepi . prohibui ego conigastum . facientem impetum . in fortunas cuiusque imbocilli? Uuio ófto neuuéreta íh conigaste demo gotho . danne er ánuártôta uuéichero mánno gûot? (Nb 29, 5-8) 「弱者から誰彼を用捨なく財産を強奪しようとするコニガトゥスを、私は何回妨げたことでしょう」。Prouincialium fortunas pessumdari . tum priuatis rapinis . tum publicis uectigalibus . non aliter indolui . quam qui patiebantur. Nieht éin búrgliuto . núbe óuh sô íh sáh tero lântliuto gûot ferôset uuérden . úmbe frônozíns . álde óuh súf fône íomannes nôtnúmfte . dáz uuág mír ébenhárto díen . díe iz liten (Nb 29, 20-25) 「私は地方人の財産が私人の掠奪によって、あるいは公租のために荒されるのを、被害者と同様に歎いたものです」。これらの fortuna は常に複数形であられ、bona, census と同じく、「財産」の意味を有している。古典ラテン語においても、cum……sua……omnia impedimenta atzue omnis fortunas conflagrare intellexerent (Caes. Gal. 5, 43, 4) 「自分の装具や財産がみんな焼けていくのを見ながら」のように、fortuna はすでに財産の意味で用いられている。fortuna は元来「豊作をもたらす者」の意味

であったので、容易に「財産」の意味になり得たのは自然であろう。Consolatio では財産は *bona*, *felicitas*, *census* が使われている。*bona* もやはり *guot* で訳されている (Nb 54, 19; Nb 87, 23)。このように地上の財は *guot* によって訳されているが、ラテン語では常に複数形であるのに対し、ドイツ語は単数形で訳されている。これに関して Grimm はその辞典において, *namentlich kollektiv im singular für die gesamtheit des dinglichen besitzes 'vermögen, habe, eigentum' verwendet* (9, 1356) と述べている。この用法は古くは Monsee Fragment にもあらわれる。もちろん *guot* はノートカーにおいても倫理的な善との対立における善 (*bonum*) の訳語としても用いられており、その場合には、ラテン語が単数の場合には単数に、複数の場合には複数に訳されている。従って *guot* は倫理的な善の意味と物質的な幸福の両方の意味を有している。

(10) *sestunga*

sestunga は動詞 *seston* 「整える」の名詞形であり、イタリア語 *asestare* 「整える」からの借用語である (Pokorny 1004)。この語は古高ドイツ語、いなゲルマン語の中でノートカーにしかあらわれない彼の造語である。南部のザンクト・ガレンがロマン語地域に近く、彼がしばしばロマン語を耳にする機会があったことによるものであろうか。この *sestunga* が Nb 及び Nc において *fatum* の訳語、いなむしろ説明として用いられている (Nb 303, 3, 4, 20, Nc 53, 8)。Nb の第4巻注釈 42 において、*fatum* と *providentia* との関係づけをなす際に、*sestunga* を用いてノートカーはこう解釈している。Fatum hiezen die álden líute . sô seruius chît . uocem iouis . sámoso dáz mánnolichemo solti geskéhen . dáz er ímo spréchendo erlégeti. Tánân díutent knûoge . fatum úrlag. Áber sô gótes uuíllo ergân sól . an ételichên gekihten . únde an sínero úzuuértigûn séstungo . diu innera geskéinet sól uuérden. Tiu úzuuértiga séstunga . sô óuh târfóre geságet íst . héizet fatum . álso diu innera héiget prouidentia (Nb 302, 23–303, 6) 「Fatum を古代の人々は、*seruius* が言っているように、*vocem iouis* (ジュピターの声) と名づけた。あたかも、神が人に言葉によって定めたことが生じることになるが如くに。それによってたくさんの人々は *fatum* を *urlag* と解釈している。神の

意志が各々の事象において、かつ外的な秩序において生じ、内的な秩序が示される時、以上のように、外的な秩序は運命と呼ばれ、内的な秩序は摂理と呼ばれる」。これは *Consolatio* 第4巻6章における *qui modus cum in ipsa divinae intelligentiae puritate conspicitur, providentia nominatur, cum vero ad ea, quae movet atque disponit, refertur, fatum a veteribus appellatum est*(IV pr. 6)「これらの様式が神の知性そのもののなかで純粹に考察されるとき、それらは摂理と名づけられます。しかし、これらの様式が神によって動かされかつ並べられるものとの関連において眺められるとき、それらは昔の人々によって運命と呼ばれました」のノートカーによる解釈と言ってよいであろう。またこの *sestunga* は Nb 297, 22 において *dispositio* の訳語としてあらわれる。*Fatum uero dispositio inherens . rebus mobilibus . per quam prouidentia suis quaeque nectit ordinibus. Sô íst áber fatum sélbíu díu séstunga . ánaháftentíu állên uuéhsellichên dingên . mit téro prouidentia dínghlíh tuínget ze sínere órdeno* (Nb 297, 20-24)「ところが運命は変動するものに特有の定めであって、摂理はこの定めを通しておのおのものを秩序で連結します」。ここでは *fatum* は訳されることなく、*fatum* が端的に説明されている。ここにおいて *fatum-dispositio-sestunga* のラインが築かれ、*providentia* との関係が闡明化されるのである。ノートカーの脳裏にはこのロマン語起源の語が *providentia-fatum-dispositio-sestunga* の図式として浮かび上がったであろう。

(11) *urlag*

urlag はあらゆる古ゲルマン方言に広まっているゲルマン共通語である。古代ザクセン語 *orlag, urlagi*「戦争」、古英語 *orlæg*「運命」、*orlege*「戦争」、古代ノルド語 *orlog*「運命、戦い、死」、古高ドイツ語 *urlag*「運命」などとしてあらわれる。この語は2つの部分から成り立つ合成語で *ur-*と *-lag* に分析されうる、*ur-*は元来 **-uz* で古高ドイツ語で *ur-, ir-, -ar* などとしてあらわれ、「中から外へ、下から上へ」の意味をあらわしている (Krahe 39)。*-lag* の部分は印欧語根 **leg-*「横たえる (*legen*)、横たわっている (*liegen*)」にさかのぼり得る (Pokorny 658, Watkins 35)。この語の本来の意味に関しても複数の解釈がなされている。古代ノルド語な

どに「戦い」の意味があることから、-log の部分を「宣誓による協定」と解し，ur- の部分を aus と解して，全体でその協定の破棄と解する説 (Falk/Torp 801)。古ゲルマン時代のくじの棒を置き (legen)，並べて (anslegen)，人間の運命が占われたとする説 (Kienle 102)。erlegen から auferlegen，即ち das Auferlegte 「課せられたること」と解する説 (Holthausen 242, Schröbler 89) などが挙げられうる。やはり最後の説のように，動詞 erlegen との関係において「定める」→「定め」，「神による定め」即ち「運命」と解釈するのが無難ではなかろうか。この語に「戦い」の意味もあることに関して，de Vries は，古代ゲルマンの観念によれば，戦いは神の審判であると述べていることも一応首肯出来る (de Vries 683)。ノートカーも urlag と erlegen との関係を語源的に気づいていて，前出の Nb 302, 25 以降にある如く，dáz er ímo spréchendo erlégeti. Tánnân díutent knûoge . fatum úrlag. と述べている。urlag は古高ドイツ語時代を通して Glossen (古くは 10 世紀の S. Galli 242, Gl. II 8, 10 に fatum-urlag が見られる) とノートカーにあらわれるだけである。ノートカーにおいては Nb と Nc に fatum の訳語として (Nb 303, 1 Nc 72, 2; 83, 15; 157;), fatalis ordo の訳語として (Nb 306, 27), fatalis series の訳語として (Nb 314, 12), また constellatio 「星の位置」の訳語として (Nc 132, 11), あわせて 10 回あらわれるにすぎなく，使用されることの少ない語である。恐らくこの語はさらに古い文献以前の時代には頻繁に用いられたであろう古風な語と言えよう。Nc 72, 2 の fata の訳語としての複数形 urlaga は擬人化された運命の女神をあらわしているが，そのほかの Nc にあらわれる fatum の訳語としての urlag は運命を意味し，fortuna と同義と考えてよいであろう。なお urlag が constellatio の訳語としてあらわれるのは，constellatio が人間の運命に影響を及ぼすと考えられていたからであろう。

(12) tod

Nb 287, 28 において fatum が tod によって訳されている。Quid iuuat excitare tantos motus . et sollicitare fatum propria manu? Uuáz lústet íuuih ze ské-inenne sô míchelíu zórn . únde zûo-fûoren mít hénde den tîd? (Nb 287, 26-28) 「何の因果でこんなに大騒ぎをしてあなたがたはみずからの手で運命をそそのかす

か」。次の文に *si mortem petitis . propinquat ipsa sponte sua . nec remoratur uolucres equos* (Nb 287, 29–288, 1)「死はあなたがたが求めなくても、ひとりでに近づき、翼のある馬をおくらせはしない」とあり、上の *fatum* は実際次の文の *mors* を指していると思われる。また古典ラテン語の *fatum* も *mors* の意味を、*eadem me ad fata uocasses* (Verg. A 678)「いっそわたしを道連れにして下さればよかったのに(泉井訳)」のように有していることも考え合せられよう。従ってノートカーはコンテキストの上から正しく解釈して、*fatum* を *tod* と訳したと思われる。

(13) *hinagereccheda des gotes uuillen*

Nb 295, 7 において *fati series* 「運命の系列」は *hinagereccheda des gotes uuillen* と訳されている。*hinagereccheda* は直訳的に *sich-hinweg-strecken* を意味している。*fatum* はここで神によって定められたるものとして、*gotes uuillo* 「神の意志」と直裁的に解釈されている。

(14) *uuizegtuom*

uuizegtuom は *uuizeg* (nhd. *weissagend*) と抽象名詞構成要接尾辞 *-tuom* (nhd. *-tum*) との合成語である。この語は古高ドイツ語において *Glossen* に、*divinatio* 「予言」、*praesagium* 「予言」、*prophetia* 「予言」の訳語として、*Tatian* において *prophetia* の訳語として、及びノートカーに用いられるにすぎない。ノートカーにおいては *uaticinium* 「予言」の訳語として (Nb 349, 19), *divinatio* の訳語として (Nb 356, 12, Nc 21, 17), *praesagium* の訳語として (Nc 23, 10), *prophetia* の訳語として (Np 62, 7), *fatum* の訳語として (Nc 156, 17), その大部分は宗教的な意味において用いられている。Nc における *fatum* の訳語として *uuizegtuom* があらわれる箇所は次のようになっている。Nam *nec dubitans anteuortis . i. preuenis intrepidus fatibus . quid edat uapor sabaeorum . rapidis . i. ordentibus oris. Tū gefúreuángôst mít páldên uuizegtûomen únzuiueligo . uuáz án sabaeorum áltaro fiuren der róuh chunde* (Nc 156, 14–18)「汝は果敢なる予言で疑わずして予知する、サバ人の祭壇の炎が何を告知しているかを」。このようにこの *fatum* はコ

る fatum とはニュアンスを異にしている。

以上, Consolatio を中心にして, そこにあらわれた fatum, fortuna 等の語とノートカーにおけるそれらの訳語について検討して来た。なお fortuna, 特に bona fortuna の訳語として heil (nhd Heil) が挙げられるが, これは Nr のみに 1 回あらわれるのみで, 本ノートでは Nb を中心に進めて来たので, この heil については検討の対象からはずした。

fatum, fortuna 及びその関連の語とノートカーの訳語との関係を表わせば表のようになろう。

このように fortuna と fatum はその訳語において明確に区別されていて, ただ misseskiht を除いて重複することはない。だがその fatum も aduersa fortuna と考えてよかった。ノートカーは多少の神学的な改変をしているとはいえ, 概ねボエティウスの fortuna 観を受けつぎ, fortuna の持つ種々な特性に対し, 的確な訳語を創造し, これに対処した。fortuna と峻別されるべき fatum は Consolatio の第 4 巻においてほとんど訳されていずにラテン語 fatum のままである。fatum と対応されるべき prouidentia も, 第 5 巻における訳語 foresiht (nhd. Vorsehung) を除いて, 第 4 巻では訳されていない。それは fatum と prouidentia が同時に用いられる時, これらは神に帰属すべき類概念として顕著にあらわれるときであろう。

ノートカーはボエティウスを越えて特に新しい思想を発展させはしなかったが, 巧みに造語を創造し, あるいは古来の語に新しい概念をもりこんで, ドイツ語に新しい生命をもたらしたことは否定出来ない。

参 考 文 献

- Bothius: *Trost der Philosophie · lateinisch-deutsch hrsg und übersetzt von E. Gegenschatz u. D. Gigon* 1967
 L. Cooper: *A concordance of Boethius* 1928
 H. S. Falk / A. Torp: *Norwegisch-Dänisches etymologisches Wörterbuch* 1960
 J. C. Frakes: *Fortuna in the consolatio: Boethius, Alfred and Notker* 1982 (Diss)

- K. E. Georges: *Ausführliches lateinisch-deutsches Handwörterbuch* 1969
- J. und W. Grimm: *Deutsches Wörterbuch 16 Bde* 1834–1954
- J. Gruber: *Kommentar zu Boethius de Consolatione Philosophiae* 1978
- N. G. L. Hammond/H. H. Sculiard: *The Oxford classical Dictionary* 1970
- F. Holthausen: *Altenglisches etymologisches wörterbuch* 1974
- M. v. Kienle: *Der Schicksalsbegriff im Altdeutschen, in: wörter und Sachen Bd. 15* 1933
- F. Kluge/W. Mitzka: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache* 1967
- H. Krahe/W. Meid: *Germanische Sprachwissenschaft 3 Wortbildungslehre* 1967
- W. P. Lehmann: *A Gothic Etymological Dictionary* 1986
- E. Luginbühl: *Studien zu Notkers Übersetzungskunst* 1970
- M. Mehring: *Die Lehnprägungen in Notkers Übersetzung der "Nuptiae philologiae et Mercurii" des Martianus* 1958 (Diss)
- Nb=*Notkers des Deutschen Werke*, hg. v. E. H. Sehr/T. Stark *Boethius, De consolatione philosophiae* 1966
- Nc=*Notkers des Deutschen Werke* hg. v. E. H. Sehr/T. Stark, *Martianus Capella, De nuptiis philologiae et mercurii* 1966
- Np=*Notkers Übersetzung des psalters und der katechetischen Denkmäler* ed. P. Piper 2 Bdc 1883
- Nr=*De arte rhetorica* ed. P. Piper *Die Schriften Notkers und seine Schule Bd 1* s. 623–684
- F. P. Pickering: *Augustinus oder Boethius I* 1967
- J. pokorny: *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch Bd1* 1959
- R. V. Raumer: *Die Einwirkung des Christentums auf die Althochdeutsche Sprache 1851. repr.* 1972
- W. Sanders: *Glück, zur Herkunft und Bedeutungsentwicklung eines mittelalterlichen Schicksalsbegriff* 1965
- H. Scheibe: *Die Gedichte in der Consolatio philosophiae des Boethius* 1972
- I. Schröbler: *Notker III von St. Gallen als Übersetzer und Kommentator von Boethius' de consolatione philosophiae* 1953
- J. de Vries: *Altnordisches etymologisches Wörterbuch* 1977
- C. Watkins: *The American Heritage Dictionary of Indo-European Roots* 1985
- J. Weisweiler/B. Wetz: *Deutsche Frühzeit in: Maurer/Rupp, Deutsche Wortgeschichte I* 1974